

## 平成22年度事業状況報告書

### I 会議の開催について

(1) 理事会の開催	第1回	平成22年	6月	7日
	第2回	平成23年	3月	1日
(2) 常務理事会の開催	第1回	平成22年	10月	14日
	第2回	平成22年	11月	2日
	第3回	平成22年	12月	9日
	第4回	平成23年	1月	25日
(3) 評議員会の開催	第1回	平成22年	6月	7日
	第2回	平成23年	3月	7日

### II 事業の実施について

研究所の自主研究および各種研究の概要は次の通りである。

#### 1号事業 人間の全ライフサイクルを通じた健康投資（バイオ・インシュアランス） モデルに関する調査研究

##### ○脳・心と教育研究会（自主研究A）

(1) 2009年度末の「第2回応用脳科学シンポジウム」（主催：生存科学研究所、会場：東京女子医科大学弥生記念講堂）では、乳幼児発達研究の最先端を基調にして、武見太朗先生の生存科学研究所設立趣旨に則った研究会を広く一般に公開して開催し、大きな反響を得た。特に、生存科学の根幹となる人間に関係する多くの学問分野を架橋・融合した内容で、自然科学（物理学・数学）、医学（小児神経科学・小児科学・疫学）のほか、教育学・心理学を含む人文社会科学系が互いに深く連携した議論を行った。この内容に関して、広く公刊するご提案を出版社側から頂戴し、2010年11月に一般の書籍として出版した。生存科学の概念を広く知って戴くために、実質的な効果が得られると考えられる。この書籍の中に、財団法人生存科学研究所主催の当研究会のシンポジウムであったことを明記した。日本保育学会の秋田喜代美会長（東京大学教授）の強いご推薦も戴き、多くの大学の教育・保育関係者、多くの幼稚園・保育園の指導者らによって購読されている。書名と出版社は次の通り。

『乳幼児のための脳科学』（小泉英明編著）、かもがわ出版、京都、2010。

(2) 2010年8月にイタリアで開催された国際会議に、生存科学研究所の「脳・心と教育」研究会が招聘された。この会議のなかで、日本から推薦したプログラムには、日本人計4名が参加した。若手研究者1名の航空運賃の一部を生存科学研究所予算から使用させて戴き、他の航空運賃は文部科学省科学研究費や日立製作所研究費他で負担した。日本からの出席者全員の現地（シリア）での会議費・滞在費用は、イタリアのエトーレ・マヨラナ記念財団「文化としての科学」研究所が全てを負担した。生存科学研究所「脳・心と教育」研究会から新たな概念として発信した「脳科学と芸術」は、この5日間の国際会議にて中心課題となった（『脳科学と芸術』（小泉英明編著）、工作舎、東京、2008.）。この会議では、ハーバード大学やケンブリッジ大学の精鋭を凌いで、日本から参加した Ms. Soraya UMEWAKA（プリンストン大学卒・比較政治学）が最優秀若手研究者賞を受賞した。

(3) 2010年11月に「第3回応用脳科学シンポジウム」（主催：生存科学研究所、会場：サ

ンケイプラザ)は、「未来」という概念を、神経科学、言語学、行動学などの諸分野から検討した。この研究会の内容は、日刊工業新聞の正月特集の一つとして、半面以上を使って報道された(2011年1月5日付第23面:「脳科学が挑む「幸福とは?」)。これは、ドラッカーより先に、武見太郎先生が提示された「未来からの反射」という概念を、神経科学的に裏付ける試みでもある。

本シンポジウムのプログラム内容は次の通り。

第3回応用脳科学シンポジウム(平成22年12月4日)

- ①感動と幸福、そして未来という概念 小泉 英明
- ②思考するための言語—意識下で回る音韻ループ、そして未来時制—  
首都大学東京大学院 人文科学研究科 教授 萩原 裕子
- ③社会能力と“未来”—脳機能イメージング法によるアプローチ—  
自然科学研究機構 生理学研究所 教授 定藤 規弘
- ④身体表現と言語表現  
日本マイム研究所 所長 佐々木博康
- ⑤人間とは何か—チンパンジー研究から見えてきたこと—  
京都大学霊長類研究所 所長 松沢 哲郎

なお、本研究会で提示した新たな概念については、2011年度に学術誌「生存科学」で報告する準備を進めている。また、各講演者の了承のもと、シンポジウムの記録ビデオが制作され、生存科学研究のアウトリーチに役立っている。さらに独立行政法人科学技術機構が運営するテレビ局サイエンスチャンネルの番組としての放映を検討する。(なお、以前の生存科学シンポジウムのいくつかは既に番組として放映され、多くの教育機関でそのストリーミングが活用されている。)

本概念については、一般のいくつかの出版社からも出版に関する依頼があり、2010年度に出版された『脳の科学史』(小泉英明著、角川書店(角川SS新書)、東京、2011.)にも一部を報告した。養老孟司東京大学名誉教授の強力なご推薦により、広く購読されつつある。

○ 「元気と病気のあいだ」研究会(自主研究B)

平成20年度から3年間の計画で始まった最終年度は以下の講演とそれに引き続く議論を行った。3年間の活動を総括した報告書を作成中である。

- (1) レジリエンス—病を防ぎ、病を治す心身の働き—  
平成22年 4月22日  
翠星ヒーリングセンター 八木 剛平
- (2) 元気と病気のための社会的決定要因—なにをどうはかるか?—  
平成22年11月 8日  
東京大学大学院医学系研究科 教授 橋本 英樹
- (3) 養生の思想—元気と病気をつなぐ—  
平成22年12月16日  
茨城大学教育学部養護教諭養成課程 教授 瀧澤 利行
- (4) 近代的身体概念のイデオロギー分析  
平成23年 2月 3日  
北海道教育大学釧路校 准教授 北澤 一利

- (5) 現代中国国民の健康観と直面する医療・健康問題  
 平成23年 2月18日  
 北京大学医学部公共衛生学院教授 王 培玉
- (6) サファリングと生活者中心のヘルス・ケア  
 平成23年 3月30日  
 山口大学大学院医学系研究科講師 星野 晋
- 川崎病研究会（自主研究D）
- (1) 日本川崎病研究センターとの共同研究についての報告、評価  
 平成22年10月22日  
 日本川崎病研究センター理事長 川崎 富作
- フランスにおける医療改革に関する研究会（自主研究E）
- (1) 研究会の趣旨確認  
 平成22年 6月 1日
- (2) フランスでの看取りの変化  
 平成22年 9月13日  
 国際医療福祉大学 高橋 泰
- (3) フランスの医療制度改革  
 平成22年10月26日  
 元 千葉大学 藤井 良治
- (4) フランスの介護制度改革  
 平成23年 1月25日  
 元 千葉大学 藤井 良治
- (5) フランスの高齢者介護サービスと介護職人材育成政策  
 平成23年 1月31日  
 元 金城大学 藤森 宮子
- (6) フランスの医療技術評価 & フランスの医療費  
 平成23年 3月10日  
 国際医療福祉大学 池田 俊也  
 福祉未来研究所 府川 哲夫
- 口腔システム研究会（自主研究F）
- (1) 比較解剖的アプローチから考察した顎関節の形態と機能の進化  
 平成22年 5月11日  
 東京大学博物館館長 遠藤 秀紀
- (2) 幹細胞による再生医療をめざして～口腔システムの生物学的再構築は可能か？  
 平成22年 7月27日  
 日本歯科大学生命歯学部教授 中原 貴
- (3) 力学的観点から見た顎顔面の構造について  
 平成22年11月18日  
 佐藤歯科院長・日本歯科大学非常勤講師 佐藤 忠敬

- (4) 咬合・顎位と中耳機能との連携について  
平成22年12月21日  
Q's Dental Clinic院長 小林 久純
- (5) 科学者からみた生命—科学的生命とは何か？  
平成23年 3月10日  
日本歯科大学生命歯学部客員教授 石川 博
- 健康の社会的決定要因の形成に関する研究会（自主研究G）
- (1) 地域疫学国際ワークショップ in 沖縄2010（今帰仁フィールドワーク）  
平成22年 7月29日～30日  
ハーバード大学公衆衛生大学院教授 Ichiro Kawachi  
ヴァージニア大学医学系大学院教授 Robert D. Abbott  
オレゴン健康科学大学アルツハイマー研究所部長 Hiroko H. Dodge  
東京大学大学院医学系研究科教授 佐々木 敏  
コロンビア大学メディカルセンター准教授 Nikolaos Scarmeas
- (2) 社会疫学シンポジウム in 沖縄2010  
高齢社会を乗り切る地域のカーソシャルキャピタルの可能性—  
平成22年 7月31日  
ハーバード大学公衆衛生大学院教授 Ichiro Kawachi  
日本福祉大学社会福祉学部教授 近藤 克則  
オーボアカデミー大学名誉教授 Guy Bäckman
- 「私の声」の発見—「大人の教育としての哲学」研究会（自主研究K）
- (1) An Economy of Living, A New Economy of Education  
平成22年 8月21日  
ロンドン大学教育研究所 Paul Standish
- 臨床倫理指針研究会（自主研究I）
- (1) シンポジウムについての打合せ・医師のプロフェッショナリズムレクチャー  
平成22年 7月31日  
立教大学社会学部 大生 定義
- (2) シンポジウムについての打合せ・生命倫理レクチャー  
平成22年 9月 5日  
上智大学生命倫理研究所所長 青木 清
- (3) シンポジウムについての打合せ・白衣式レクチャー  
平成22年10月31日  
慶應義塾大学医学部学生 戸谷 遼
- (4) 公開シンポジウム「医師の使命を考える」  
平成22年12月18日  
第1部 医師・医学生の立場から  
立教大学社会学部 大生 定義  
北里大学北里研究所病院総合内科 竹下 啓

- 慶應義塾大学医学部学生 戸谷 遼
- 第2部 チーム医療の立場から
- 総合母子保健センター愛育病院新生児科 加部 一彦
- 特別医療法人博愛会相良病院看護部 江口 恵子
- 神戸大学医学部附属病院薬剤部 平井みどり
- 第3部 患者・社会の立場から
- 北里大学医学教育研究開発センター医学原論研究部門 齋藤有紀子
- ジャパン・ウエルネス 大井 賢一
- 東京大学法学部 樋口 範雄
- 日本川崎病研究センター（共同研究）
- (1)国際共同研究：日本・イルクーツク川崎病国際シンポジウムおよび日露両国の国際共同研究に関する協議
- 主任研究者 前埼玉県立大学学長 柳川 洋
- (2)川崎病の長期疫学研究
- 主任研究者 自治医科大学公衆衛生学教授 中村 好一
- (3)公募研究
- ①川崎病患児における細菌叢の経時的変動解析
- 主任研究者 東京大学大学院医学系研究科 絹巻 暁子
- ②川崎病血管炎惹起因子候補一次資質量ペプチドイオン7個からの原因蛋白質の同定
- 主任研究者 自治医科大学小児科 金井 孝裕
- ③冠動脈炎の発症機序と治療に関する研究
- 主任研究者 国立成育医療センター研究所  
免疫アレルギー部 松田 明生
- ④川崎病における抗 Peroxiredoxin2 (Prx2) 抗体の臨床的意義の検討
- 主任研究者 聖マリアンナ医科大学難治療  
研究センター 唐澤 里江
- ⑤小児冠動脈内径標準値作成多施設共同研究
- 主任研究者 群馬大学大学院小児科 小林 徹
- ⑥川崎病血管炎成立と進展のメカニズムにおける酸化ストレスの関与について
- 主任研究者 京都府立医科大学小児循環器  
腎臓学 八幡 倫代
- ⑦難治性川崎病の病態解明と心血管後遺症を残さない治療法に関する研究
- 主任研究者 北里大学大学院医療系研究科 扇原 義人
- ⑧部位指向性製剤を用いた川崎病血管炎治療法開発に関する

基礎研究

主任研究者 京都府立医科大学小児循環器 中村 明宏  
腎臓学

⑨効果的ステロイド併用療法の開発を目指した川崎病急性期  
における内因性副腎皮質ステロイド分泌の解析

主任研究者 浜松医科大学小児科 佐野伸一郎

(4)平成 22 年度研究事業報告会

平成 22 年 6 月 5 日 (土) 於：東京 YWCA 13:00~17:00

2 号事業 地球的な立場からの医療資源の開発と配分に関する調査研究及びこれらを通  
じた地域における生存基盤に関する調査研究

○生きられる空間—生存環境を考えるための基本思想の研究— (自主研究 C)

本研究会は、「生きられる空間」を建築環境を中心に再考し、都市間格差、中心街の空洞化、地方都市の衰退など、多くの問題を抱える都市空間に対し、前向きな提言を試みようとして出発した。多方面にわたる問題群のなかから 22 年度は主としてヒューマン・スケールにしぼり、大都市や中小都市、古い都市や新興都市を調査、そこから物理的スケール、生理的スケール、感覚的スケール市場経済スケールなど、人間にとってふさわしいスケールとは何かを実感的に把握しようとした。調査地域は京都、近江八幡市、金沢市、東京中心部など、成果として、まず研究会の構想を「生きられる時空間—都市の人間学的考察」と題して「生存科学 A」第 21 号に発表。同じく第 21 号に都市空間と建築の健全なあり方を考える「社会の健康・健康な社会」(藤原成一)、「健康な空間」(深谷基弘)を発表した。

○川崎病研究会 (自主研究 D : 1 号事業参照)

○フランスにおける医療改革に関する研究会 (自主研究 E : 1 号事業参照)

○口腔システム研究会 (自主研究 F : 1 号事業参照)

○医療政策研究会 (自主研究 H)

(1) 新年度顔合わせ及び事業計画の確認

平成 22 年 4 月 1 日 研究メンバー全員

(2) 医師の超過勤務の問題点について

平成 22 年 4 月 30 日

研究メンバー 中島 勸

(3) 勤務医のあるべき労働環境

平成 22 年 5 月 21 日

聖隷浜松病院 腫瘍放射線科主任医長 崔 乗哲

(4) 研究手法について

平成 22 年 6 月 16 日 研究メンバー全員

(5) 医療現場と労働法

平成 22 年 7 月 9 日

東京大学社会科学研究所教授 水町勇一郎

(6) 医師を「しぼる」関連法規

- 平成22年 8月20日  
研究メンバー 佐々木昌弘
- (7) 医療者の労働時間と医療安全  
平成22年 9月10日  
民主党衆議院議員 梅村 聡
- (8) 医療者の時間外診療とその打開策について  
平成22年10月29日  
小樽市保健所所長 江原 朗
- (9) 医療の安全・質学会における発表  
平成22年11月20日  
研究メンバー有志
- (10) ANA佐賀便・機長労災事件高裁判決の報告  
平成22年12月15日  
弁護士 米倉 勉
- (11) 医師のメンタルヘルス—産業医の立場から  
平成23年 1月26日  
順天堂大学医学部附属練馬病院 吉方 りえ
- (12) 奈良県立病院の割増賃金裁判の行方と解決策について  
平成23年 2月12日  
奈良県医療政策部 武末 文男
- 日本川崎病研究センター（共同研究A：1号事業参照）

3号事業 人文・社会の諸科学からの視点をも含む総合的な生存モデルに関する調査研究

- 脳・心と教育研究会（自主研究A：1号事業参照）
- 「元気と病気のあいだ」研究会（自主研究B：1号事業参照）
- 生きられる空間—生存環境を考えるための基本思想の研究（自主研究C：2号事業参照）
- 川崎病研究会（自主研究D：1号事業参照）
- 口腔システム研究会（自主研究F：1号事業参照）
- 医療政策研究会（自主研究H：2号事業参照）
- 日本川崎病研究センター（共同研究：1号事業参照）

4号事業 上記各号の調査研究に基づく総合的な健康政策に関する調査研究

- 「元気と病気のあいだ」研究会（自主研究B：1号事業参照）
- 川崎病研究会（自主研究D：1号事業参照）
- フランスの医療改革に関する研究会（自主研究E：1号事業参照）
- 医療政策研究会（自主研究H：2号事業参照）
- 日本川崎病研究センター（共同研究：1号事業参照）

5号事業 上記各号の調査研究に関する国際教育研究機関との連携

- 脳・心と教育研究会（自主研究A：1号事業参照）
- フランスの医療改革に関する研究会（自主研究E：1号事業参照）
- 日本川崎病研究センター（共同研究：1号事業参照）

6号事業 その他上記各号に関連して必要となる調査研究

- 川崎病研究会（自主研究D：1号事業参照）
- 日本川崎病研究センター（共同研究：1号事業参照）
- 中長期基本構想委員会（自主研究L）

(1) 自主事業の評価

平成23年 3月 3日

口腔システム研究会	荒谷 昌利
健康の社会的決定要因の形成に関する研究会	等々力英美
「元気と病気のあいだ」研究会	津谷喜一郎
臨床倫理指針研究会	竹下 啓
脳・心と教育研究会	小泉 英明
フランスの医療改革に関する研究会	府川 哲夫

委託研究は以下の12件について実施された。

(1) 成年後見制度における高齢者の判断能力反省に関する心理学的研究

東京学芸大学准教授 松田 修

(2) 高齢者の意志能力-法律的判断と医学的判断の関係-

翠会和光病院長 斎藤 正彦

(3) 刑事裁判での責任能力判断における精神鑑定意見の取り扱いと意思決定過程の分析

東京都立松沢病院精神科部長 黒田 治

(4) 責任能力判断における精神鑑定に関する司法の判断

香川大学法学部准教授 平野 美紀

(5) 動脈硬化性疾患克服のためのLOX-1作用機構の解明とその制御法の開発

国立循環器病センター研究所生理部長 沢村 達也

(6) 特発性心筋症の病因と病態形成機構に関する研究

東京医科歯科大学難治疾患研究所 木村 彰方

(7) 高血圧発症・進行機転におけるTRP蛋白質の役割解明

福岡大学医学部生理学教授 井上 隆司

(8) 疾患感受性・抵抗性遺伝子解析に基づいた動脈硬化症および血栓症の病態形成機構の解明

東京医科歯科大学大学院疾患生命科学研究所准教授  
中島 敏晶

(9) 細胞運動を抑制するユニークな脂質メディエーター受容体を標的とした粥状動脈硬化療法の開発

金沢大学医学系研究科教授 多久和 陽

(10) in vivo ナノイメージングによる心不全の分子メカニズムの解明

東京慈恵会医科大学教授 栗原 敏

(11) Kチャネルを阻害する I a群、及びIII群候不整脈薬のhERGチャネル活性化ゲート機構に対する作用の解析

大阪大学大学院医学系研究科 教授 倉智 嘉久

(12) 拡張型心筋症および心不全モデルマウスをもちいた病態発現分子メカニズムの解明と治療薬の探索

九州大学臨床薬理准教授 森本 幸生

研究成果は5月末までに生存科学研究所に提出され、基本構想委員会により、事業が初期の目的を達成できたか、研究費配分は適切であったかなど、検討が加えられる。

○学術誌「生存科学」の発行

(1) VOL. 21, SER. A SEPT. 2010

(2) VOL. 21, SER. B e. s. i. Dec. 2010

(3) VOL. 21, SER. B 進行中

### III 一般的運営について

本年度も一般会員及び公募による自主研究、委託研究が実施された。期末には、中長期基本構想委員会が研究責任者のヒアリングを行い、研究・調査活動が適正に行われたか、評価を行った。①脳・心と教育研究会は「応用脳科学シンポジウム」を開催、すでに全国的に周知されているため、多くの参加者が集まり、熱心な討議が行われた。昨年開催したシンポジウムはかもがわ出版より『乳幼児のための脳科学』（小泉英明編著）と題して刊行された。②健康の社会的決定要因の形成に関する研究会も昨年同様ハーバード大学公衆衛生学大学院、ヴァージニア大学医学系大学院、コロンビア大学メディカルセンター准教授、オレゴン健康科学大学アルツハイマー研究所部長など沖縄の地域社会に関心を寄せる研究者を中心に、「地域疫学国際ワークショップ in 今帰仁/沖縄」を開催、ワークショップが沖縄の地に定着しつつある。この内容については現在出版社からの刊行を模索中である。③医療政策研究会は、今年度は病院の労働関係法令違反についての現状と対策について調査・研究を行っており、都道府県労働局長宛て行政文書開示請求をし、現在集計中である。また、3月11日の東日本大震災による福島第1原発事故に関し、医療政策研究会有志として、「福島第1原発の事故における外部調査対策委員会の設置を求める提言」をまとめ、関係機関に提出、生存科学研究所ホームページに掲載中である。④臨床倫理指針研究会は公開シンポジウム「医師の使命を考える」を⑤「私の声」の発見—「大人の教育としての哲学」研究会は本年度もロンドン大学教授「An Economy of Living, A New Economy of Education」と題したセミナーを一般に公開し、本研究所の調査研究成果を社会に還元する努力が払われた。委託研究は昨年度よりさらに多く、12件が実施された。報告書は学術誌「生存科学」に発表される予定である。